

下北半島初期農耕社会における 環境・資源利用に関する考古学的研究

An archaeological study on utilization of
environment and resources of early agrarian society
in the Shimokita Peninsula

高瀬 克範

TAKASE Katsunori

高瀬は、青森県むつ市奥内字竹立 4-1 ほかに所在する弥生時代前期並行期の集落である江豚沢(ふぐさわ)遺跡(北緯 41° 11' 46、東経 141° 16' 32)の発掘調査を、2003～2009 年にかけて行ってきた。2009 年度の「人文科学研究所 個人研究 1 種」による研究では、すでに発掘が終了している第 2 号竪穴住居跡から採取していたサンプルを利用して、当時の環境と資源利用を復元するための研究を行った。

第 2 号竪穴住居跡は、包蔵地の東北部に位置する長径約 9.4m、短径約 8.3m の卵形プランを呈する竪穴住居跡である。4 本の支柱は菱形に配置され、中央部に地床炉がともなう。炉・床面出土土器から、時期は弥生時代前期並行の砂沢式並行と判断される(約 2400～2200 年前)。

この竪穴住居跡は 2003 年に存在が確認され、2006 年・2007 年に本格的な発掘調査が行われた。2007 年の調査時に、住居内を 1m メッシュで区切り、それぞ

れのグリッドの床面から貼床にかけての土壌から 46 サンプルを採取した。このうち、住居内のほぼ全域にわたる 44 サンプルを利用して、その内部に含まれるイネ科植物の機動細胞(プラント・オパール)の定量分析をおこなった。目的は、1) プラント・オパールの種類から当時の植物利用の内容・遺跡周囲の環境を明らかにすること、2) その出土位置から住居内の空間利用を明らかにすること、3) その出土状態から穀物類の利用・貯蔵形態を明らかにすること、の 3 点である。分析は、鈴木茂氏・米田恭子氏(株式会社パレオ・ラボ)に委託して行った。

分析の結果、イネのプラント・オパールは全く観察されなかった。最も多く検出されたのはクマザサ属型で、半数を越える試料で土壌 1g あたり 100,000 個以上が検出されており、200,000 個を越えているサンプルも 4 試料存在した。ついで多く観察されたのはウシクサ族であるが、10,000 個を越えているのは 1 試料のみであった。キビ族も 1 試料において 10,000 個を越えている。プラント・オパールの生産量の少ないキビ族としては高い数値を示しているが、その他の多くの試料では 1,000 個～3,000 個にとどまる。ネザサ節型も多数の試料から検出されたが、個数としては 2,000 個前後が多くなっている。その他、ヨシ属やシバ属が若干観察されている。

こうした分析結果から、当時の利用植物のなかにイネが存在していたのかどうかについては、明確な手がかりを得ることができなかった。ただし、多数のキビ族が検出されていることから、かりにイネ科の栽培植物が利用されていたとすればアワ、ヒエ、キビといった雑穀類の利用は想定できることになる。しかしながら、キビ族のなかには上記栽培植物とともにイヌビエ、エノコログサなどといった雑草類もふくまれており、いまのところ栽培種と野生種の区別が難しいのが現状である。したがって、ここで観察されたキビ族についても栽培植物かどうかは不明であり、必ずしも雑穀の利用を直接的に裏付ける情報とはいえない点には注意が必要である。

なお、最も多く検出されているクマザサ属型については、遺跡周辺に成立していた森林の下草の存在として分布していたクマザサ属型のササ類、すなわちチシマザサやチマキザサといったササ類よりもたらされたと推測される。また、ウシクサ族やネザサ節型については、遺跡周辺の空き地や森林の林縁部などの日のあたる開けたところでの生育が考えられるススキ、チガヤ(ウシクサ族)やアズマネザサ(ネザサ節型)などと推察される。これらは、竪穴住居利用時や構築前の

集落周囲の植生の一端を表しており、景観の復元にとって貴重なデータとなる。

住居内の空間利用や穀物の貯蔵形態についても、明確な分布の偏りや穀物の種類による出土状況の違いが認められなかったことから、今回の分析結果からは詳しい見通しをえることはできなかった。しかしながら、今回の分析において、弥生時代前期並行期の下北半島においてイネ利用に関わる情報がなかったこと、それに対して雑穀の利用の可能性は残されることを具体的に示すことができた点は大きな成果であった。また、これまで水田跡の有無の判断に大きな効力を発揮してきたプラント・オパール分析が、住居内の土壌にも適用されることで、当時の利用穀物・住居内の空間分布・資源の貯蔵形態などに関する有益な情報を提供する糸口をつかむことができた点でも、今後の発掘調査方法・考古学的研究に一石を投じる結果が得られたと考えられる。